様式(細則 6-2)

6 年 8月22日

浜田市議会議長　様

議員名 牛尾 昭

研　修　受　講　報　告　書

下記のとおり研修を受講したので報告します。

記

1．研修名

ワインつくりによる地域振興
～個人の楽しみの先に産業としての成長はあるか？～

2．受講の目的（市政との関連など）

耕作放棄地対策として。

3．期間（移動日を含む）

令和6年 8月 8日（木） ～ 令和6年 8月 8日（木）

4．経費　1000 円

（経費内訳　受講料　　円 、旅費　　円 ）

5．研修のポイント・議員活動や市政への反映など

耕作放棄地の有効利用として。

6．研修内容
（詳細は別紙のとおり）

別紙にて。

浜田市議会 受付 6.8.22

演 題：ワインつくりによる地域振興
～個人の楽しみの先に産業としての成長はあるか？～

日　時：令和６年８月８日　　19～21 時（オンライン）
研修先：スマート・テロワール協会
講　師：経済学者・経営学者　叶芳和 氏
講　師：ヴィラデストワイナリー社長　小西超 氏
講　師：山崎ワイナリー社長　山崎大地 氏
進　行：日本総研上席研究員　藻谷浩介 氏

叶芳和 氏

国産ワインシェア 6%、輸入ワインシェア 94% ― 伸ばすには？ 生産が出来るのか?

日本人一人当たりのワイン消費量年間　4 本
フランス・・・23 本
イタリア・・・59 本
アメリカ・・・9 本
外国に比べると消費量が少ない ― 伸びしろがある。

*日本のワイナリーの広域性 ― 耕作放棄地にブドウ ― 明治の桑畑(傾斜地)
今使っていない ― ワイン造りに合う。

*ワインは人を呼ぶ ― 特に女性 ― ワインツーリズム。
ワインを造る話 ― 産業論。
ワイナリーの数（2011)159 箇所、(2017)303 箇所、(2023)468 箇所
何故増えているか?

*ワイン造りはワクワク、陶芸家と一緒で芸術である。

*インキュベーションの仕組み
① ワインアカデミー ～ 新潟県
② 勝沼型 ～ 働きながら独立する。
③カスタムクラッシュ型 ～ 委託醸造でのちに独立する。

*ワイナリーの数
山梨県 ― 55-92 北海道 ― 7-55 、 長野 ― 12-72
ワイン経営体は、世界より遅れている。大手が全体を引っ張っている。

*ワインは成長するか?
国産ブドウの供給が出来るかどうかにかかっている。食べるのと飲む兼用品種の栽培 ―ワイン用に回るブドウが品薄 （シャインマスカットは 2000 円/kg、 ワイン用は 300 円/kg）ブドウ農家の高齢化 ― 生食からワインへ。
ワイナリーの自家農場の拡大 ― 水田をワイナリーに変えている（出雲市など）― ワイン産業は日本の農村の未来である。

日本の農村の再生

小西超氏　ヴィラデストワイナリー社長

千曲川ワインアカデミーの取り組み

県がワインブドウ団地造成 11 社が入植 ～ 千曲川ワインバレー

～ 移住し就農

＊ 信州ワインバレー構想は現在 80 社参加

今後の課題

①産地としての発信の強化

②機械の共同利用

③GI 長野認証 ― 世界に通用するワイン造り

山崎大地氏　山崎ワイナリー社長

～ワインつくりの楽しさはどこに接続するか～

場所は石狩平野で千歳空港に近い ― その年の気候に合せる。

①ワインを造って何をするのか

②加水をしない唯一の酒類

③地域の特性を反映したもの

④ 地域の価値変動と行動変容。

各氏のまとめ

叶　氏：ワイン造りは自己実現である。

山崎氏：ワインは人つくり一人が集まってくる。

小西氏：ワイン造りはブドウ作りである。

考察

耕作放棄地の対応は様々で出雲のように、水田をぶどう畑にしワイナリーを作り、日本の農村の再生の見本のようなところがある。しかも、現在の出雲ワインは、日本を代表するブランドに成長している。

当市においても、ワイナリーをつくるのは無理でも、耕作放棄地でブドウを生産し原料供給する方法はとれると思う。あるいは、委託醸造で浜田ワインをつくる方法はあると思う。いずれにしても、あらゆる手段での耕作放棄地解消には不断の努力が肝心である。

以上報告します。　牛尾昭。